

〔原著〕

# 保護者の運動嗜好性は子ども達の活動意欲や 体力に影響をおよぼすのか

——運動実践中の子ども達の体力・活動量変化による検討——

中野 貴博<sup>1</sup>, 四方田 健二<sup>1</sup>  
坂井 智明<sup>1</sup>, 沖村 多賀典<sup>1</sup>

## 要 旨

同一の運動環境下にて、保護者の運動嗜好性が子ども達の体力、身体活動量に及ぼす影響を検討することを目的とした。対象者は、名古屋学院大学と瀬戸市教育委員会で主催した運動教室に参加した低学年児童45名であった。全8回の運動教室を実施し初回と最終回に体力テストを実施した。身体活動量の指標として実践中の歩数を計測した。加えて、保護者の運動嗜好性に関する調査を実施した。保護者の運動嗜好性による子どもの体力、実践中の身体活動量の違いを対応のないt検定により検討した。保護者の運動嗜好性による有意な体力改善の差は見られなかった。保護者の運動嗜好性が低い群において、実践中の身体活動量が有意に多かった。低学年児童では保護者の運動嗜好性が同一環境下における身体活動量の規定要因にはならないことが示唆された。保護者の運動嗜好性によらず均一な運動環境を提供することで、より多くの子ども達が運動に親しめる可能性が示唆された。

キーワード：運動嗜好性, 運動環境, 低学年児童

## I. 序文

我が国の子ども達の体力は第二次ベビーブーム世代をピークに長期的な低下傾向にある。スポーツ庁の全国体力・運動能力、運動習慣等調査においても、近年、若干の回復傾向は見られるものの、ピーク時にはまだまだ及ばないことが示されている [16]。体力・運動能力の要素によって傾向の違いも見られ、一部では回復の兆しも示されているが、十分でないことは疑い

ようがない。ここで、子ども達の体力・運動能力がピークであった第二次ベビーブーム世代を考えると、現在の年齢は45～48歳ぐらいになる。平成29年度の人口動態統計によれば、平成27年度データでは、第一子出産時の母親の平均年齢は30.7歳、第二子では32.6歳である。同様に、父親では第一子で32.8歳、第二子で34.5歳である [7]。つまり、体力がピークであった世代を母親に持つ子ども達は、現在14.3～17.3歳ぐらいになっていると考えること

1 名古屋学院大学スポーツ健康学部  
Correspondence to : Takahiro Nakano  
E-mail: taka@ngu.ac.jp

Received 18 July, 2019  
Revised 8 August, 2019  
Accepted 9 August, 2019

ができる。父親基準で考えれば2歳程度若くなるが、子どもとの接点の多さで考えると、ここでは母親基準で考えておく方が適切であろう。いずれにしても、多くの子ども達が中学生後半もしくは高校生以上になっている。つまり、近年、問題視されている子どもの体力低下のターゲット世代である小学生や中学生前半 [3, 11] の子どもの親は、体力・運動能力が低下傾向を示し始めた世代になってきていると考えることができる。言い換えると、身体活動の低下や苦手意識の増加、運動離れといった傾向が顕在化した後の世代の保護者であり、これからの世代では、体力低下や身体活動の減少への問題意識が薄れ、問題がより一層顕著になることが危惧される。

このような保護者の運動への嗜好性や運動習慣および運動意識の変化は、子どもの体力に影響するという研究成果もある [1, 5, 10]。長野ら [10] の研究成果では、親の運動嗜好は子どもの体力の強力な関連要因であるとしており、保護者の運動実施状況や子どもへの運動支援にも違いがあることが示されている。また、私立学校の方が公立学校に比べ、有意に良好であることも示されており、経済的な影響による環境の違いが、子ども達の運動やスポーツの機会に影響を及ぼし、結果的に体力・運動能力に違いを与えていると推察することができる。

一方、子ども達自身が運動や体育授業を楽しい・好きと答える割合に関しては、9割以上の子どもが体を動かすことは楽しいと答えているという調査結果も存在する [15]。我々の研究でも1年生の76.6%が体育授業は楽しいと答えている [13]。また、得意・不得意という聞き方になると、学年が低いほど、得意と答える割合が高くなっていた [12]。運動が好き・楽しいといった感情と得意という感情には強い関連

が見られる [2] ことを考えると、小さい頃は運動や体を動かすことを楽しいと感じる子であっても、学年進行に伴い楽しい・好きの割合が低下し、結果的に体力・運動能力も低下してしまっている恐れがある。このように、運動や体を動かすことが楽しい・好きの割合が減少する一因として、前述した親の運動嗜好性を含む様々な環境の影響が考えられる。つまり、運動嗜好性の低い保護者であっても、本来、子どもは体を動かすことが好きであることを理解してもらい、自らの運動嗜好性に依らず、子どもに運動機会を提供することを考えてもらう必要がある。結果として、子ども達の体力・運動能力低下に良い影響が出ることも期待できる。

このような背景から、本研究では同一の運動環境下において、保護者の運動嗜好性の違いが子ども達の体力および身体活動にどのように影響しているかを検討することを目的とした。

## II. 方法

### 2.1 研究仮説

1) 同一の運動環境下においては、保護者の運動嗜好性に関わらず、子ども達の体力・運動能力の向上を期待することができる。

2) 同一の運動環境下においては、保護者の運動嗜好性に関わらず、意欲的な活動を期待することができる。

本研究では、上記の2つの研究仮説のもとに研究を行った。また、子ども達自身の運動に対する好き・嫌いや得意・苦手の意識が明確化する以前の方が、本研究仮説の検証および、研究結果の社会的貢献には適していると考え、小学校低学年の児童を研究対象とすることとした。

## 2.2 対象者

本研究の対象者は瀬戸市内の公立小学校に通う1, 2年生児童であり、名古屋学院大学と瀬戸市教育委員会で主催した運動教室に参加した低学年児童45名であった。対象児童の募集にあたっては瀬戸市教育委員会経由で市内の公立小学校すべての1, 2年生に募集要項を配布した。募集要項配布に先立ち瀬戸市教育委員会との共催体制の構築、小学校校長会における周知募集要項配布、回収への了承を得た。

募集要項には、本実践活動の主旨に加え実践内容、参加条件等を明記した。また、応募に際しては、応募児童の氏名等の基礎情報に加えて、当該年度の体力テスト（50m走、ソフトボール投げ、立ち幅跳び）の記録および参加を希望する児童の体力・運動能力の保護者評価（5件法）と運動機会が不足しているかどうか（3件法）を記載させた。

80名の応募児童の中から、性、学年の人数バランスおよび所属学校などを考慮して選出された45名を最終的な対象者とした。また、全ての実践参加児童の保護者に対し、事前に実践、調査・測定等の研究データ収集と利用に関する同意説明文書を郵送し、実践初回時に同意書を得た。加えて、全ての実践参加児童は行事参加者傷害保険に加入した。

## 2.3 運動実践内容

運動実践は7月から9月の週末、全8日間、各2時間実施した。実施時間帯は暑さを避けるために午前中とし、実施場所は名古屋学院大学瀬戸キャンパス体育館とした。実践メニューの作成にあたっては、文部科学省の幼児期運動指針[8]や同指針の実践ガイド[6]を参考にした。また、小栗ら[14]を参考に幼少期に経験することが望ましい多様な運動として、以下の6

つのカテゴリーを想定し、実践メニューを構成した。

1. 身体感覚能力を養う運動
2. バランス能力を養う運動
3. 投げる・打つ・捕るなどの道具を使う運動
4. 走能力を養う運動
5. 動きの反応・変換能力を養う運動
6. 複合的な運動の組み合わせ

さらに、本実践では、ほぼ全ての保護者が子ども達の運動の様子を観察していたため、実践の後半の回において親子で行える運動メニューを提供することで、自宅等でも運動に親しんでもらえるように配慮した。

## 2.4 測定項目

子ども達の体力・運動能力に関する項目としては、50m走、ソフトボール投げ、反復横跳びの3種目を実践の初回と最終回に実施した。初回の測定は実践の最初、最終回の測定は実践の最後、それぞれ1時間程度を利用して行われた。いずれの回も測定時間以外は、通常通りの運動実践を行った。測定方法は、文部科学省の新体力テストに準拠した[9]。身体活動の測定として、実践中の歩数を計測した。歩数計は、Panasonic社製のEW-NK32を用い、毎回の受付時に子どもたちの腰部に装着した。準備体操開始直前に開始ボタンを押し、実践終了時に終了ボタンを押すことで、実践時間中の歩数を計測した。歩数計は、毎回の実践終了時に回収した。これにより、すべての実践参加児童の計測時間に差が出ないように配慮した。また、子どもたちには、実践中に歩数計に触れないように指示し、途中参加や早退した児童のデータは分析の対象外とした。

保護者の運動嗜好性に関しては、運動に対する意識に関する質問を中心としたアンケート調

査を行った。調査用紙はA4用紙2枚で構成し、本研究においては、「運動が好きか好きではないか」、「運動が得意か得意ではないか」の2項目を分析対象とした。調査用紙は、実践最終回の開始前に配布し、終了時点までに回答、提出していただいた。

## 2.5 データ分析

体力・運動能力テスト、歩数計およびアンケート調査の結果をもとに、以下の事項に関して平均値の差を対応のないt検定により検討した。すべての分析において有意水準は5%とし、IBM社製のSPSS STATISTICS 22を用いて分析を行った。

1) 保護者の運動が好き・好きではないおよび得意・得意ではないによる初回の体力・運動能力テスト結果の違い

2) 保護者の運動が好き・好きではないおよび得意・得意ではないによる体力・運動能力テスト結果の変化量の違い

3) 保護者の運動が好き・好きではないおよび得意・得意ではないによる8日間の実践中の平均歩数の違い

## Ⅲ. 結果

### 3.1 保護者の運動嗜好性

図1に保護者の運動嗜好性に関するアンケート調査結果を示す。運動が「好き」もしくは「どちらかと言えば好き」と回答した保護者は51.4%、運動が「好きではない」もしくは「どちらかと言えば好きではない」と回答した保護者は48.6%であり、若干、好きと回答した保護者が多かった。次に、運動が「得意」もしくは「どちらかと言えば得意」と回答した保護者は18.9%、運動が「得意ではない」もしくは「どちらかと言えば得意ではない」と回答した保護者は81.1%であった。多くの保護者が、どちらかと言えば運動を得意とは思っていないことが確認された。

### 3.2 保護者の運動嗜好性による子どもの体力・運動能力テスト結果の違い

最初に、運動実践初回時の子ども達の体力・運動能力テスト結果を用いて、保護者の運動嗜好性による子どもの体力・運動能力の違いを検討した。表1は、保護者が運動が好きか好きではないかの2群で比較した結果である。いずれの項目も有意な差は確認されず、小学校低学年時においては、保護者の運動好きと子どもの体力・運動能力テスト結果には、明確な関係がな

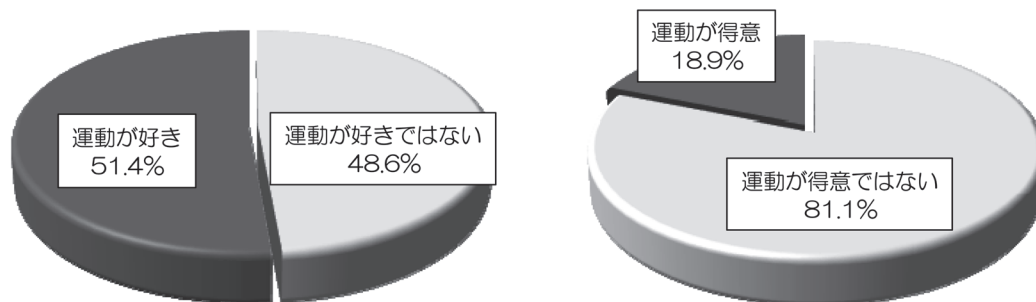


図1 保護者の運動嗜好性の回答比率

保護者の運動嗜好性は子ども達の活動意欲や体力に影響をおよぼすのか

表1. 保護者が運動を「好き/好きではない」による子どもの初回時の体力・運動能力テスト結果の違い

測定項目	好き/ 好きではない	N	平均値	標準偏差	平均値 の差	df	t値	p値
50m走	好き	19	10.8	3.05	-1.291	35	-1.632	0.112
	好きではない	18	12.1	1.45				
ソフトボール投げ	好き	19	8.0	5.71	-0.270	35	-0.174	0.863
	好きではない	18	8.2	3.34				
反復横跳び	好き	19	25.3	7.43	-1.515	35	-0.758	0.453
	好きではない	18	26.8	4.18				

表2. 保護者が運動を「得意/得意ではない」による子どもの初回時の体力・運動能力テスト結果の違い

測定項目	得意/ 得意ではない	N	平均値	標準偏差	平均値 の差	df	t値	p値
50m走	得意	7	11.8	1.46	0.449	35	0.429	0.670
	得意ではない	30	11.4	2.65				
ソフトボール投げ	得意	7	6.3	2.13	-2.189	35	-1.127	0.267
	得意ではない	30	8.5	4.99				
反復横跳び	得意	7	25.6	4.43	-0.529	35	-0.206	0.838
	得意ではない	30	26.1	6.41				

表3. 保護者が運動を「好き/好きではない」による子どもの体力・運動能力テスト結果の変化の違い

測定項目	好き/ 好きではない	N	平均値	標準偏差	平均値 の差	df	t値	p値
50m走	好き	16	0.28	0.58	0.296	28	1.081	0.289
	好きではない	14	-0.01	0.90				
ソフトボール投げ	好き	16	0.11	3.23	-0.101	28	-0.099	0.922
	好きではない	14	0.21	2.14				
反復横跳び	好き	16	3.44	6.13	-1.723	28	0.815	0.422
	好きではない	14	1.71	1.71				

表4. 保護者が運動を「得意/得意ではない」による子どもの体力・運動能力テスト結果の変化の違い

測定項目	得意/ 得意ではない	N	平均値	標準偏差	平均値 の差	df	t値	p値
50m走	得意	5	0.34	0.96	0.236	28	0.636	0.530
	得意ではない	25	0.10	0.72				
ソフトボール投げ	得意	5	1.44	4.51	1.544	28	1.161	0.255
	得意ではない	25	-0.10	2.28				
反復横跳び	得意	5	-0.20	5.26	-3.400	28	-1.218	0.233
	得意ではない	25	3.20	5.77				

いことが確認された。同様に、表2は、保護者が運動が得意か得意ではないかの2群で比較した結果である。こちらも、全ての項目で有意な差は確認されず、小学校低学年時においては、保護者が運動が得意であるかどうかと子どもの体力・運動能力テスト結果には、明確な関係がないことが確認された。

続いて、運動実践の初回と最終回における体力・運動能力テストの変化量を用いて、保護者の運動嗜好性による子どもの体力・運動能力改善の違いを検討した。ここで、変化量は対象者ごとに初回と最終回の記録の差を算出した。表3は、保護者が運動が好きか好きではないかの2群で比較した結果である。いずれの項目も有意な差は確認されず、小学校低学年時においては、保護者が運動好きであっても、そうでなくても同程度の体力・運動能力テストの改善が期待できることが確認された。同様に、表4は、保護者が運動が得意か得意ではないかの2群で比較した結果である。こちらも、全ての項目で有意な差は確認されず、小学校低学年時においては、保護者が運動が得意であっても、そうでな

くても同程度の体力・運動能力テストの改善が期待されることが確認された。

### 3.3 保護者の運動嗜好性による子どもの実践中の平均歩数の違い

身体活動の目安として、全ての対象者における全8回の運動実践中の歩数を測定した。対象者に提供した運動実践メニューは共通であり、運動と運動の合間の時間は等しく与えられた。但し、一部の運動実践メニューでは時間で区切ることで、実践の反復回数などは、本人の活動意欲に委ねる形をとった。また、全員が同じタイミングで計測の開始、終了を設定することで、測定期間も等しくなるように配慮した。歩数の合計を実践参加回数で除することで、平均歩数を算出した。以降、算出された平均歩数を用いて、保護者の運動嗜好性による子どもの身体活動の違いを検討した。図2は、保護者が運動が好きか好きではないかの2群および、得意か得意でないかの2群で比較した結果である。保護者が運動が好きか好きではないかの比較では、運動が好きではない保護者の子どもの方が500

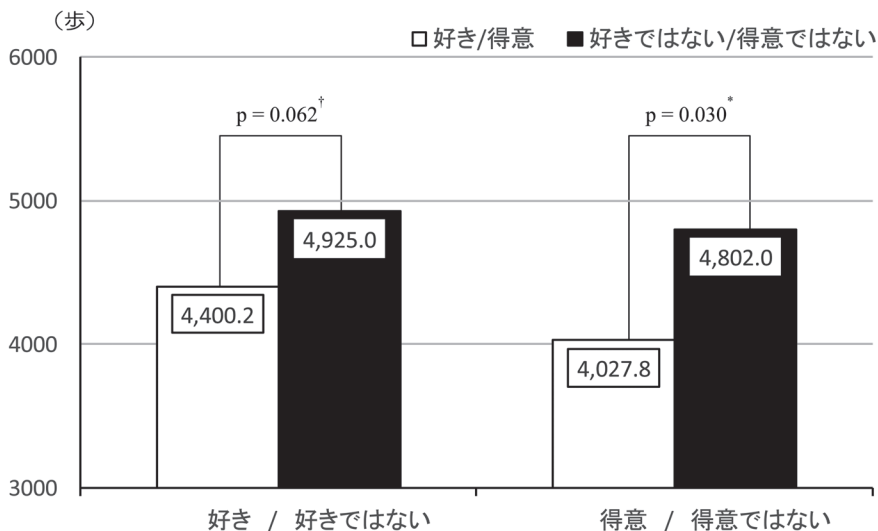


図2 保護者の運動嗜好性による子どもの運動実践中の平均歩数の違い

歩強、実践中の平均歩数が多くなっており、統計的には有意傾向な差であった。同様に、保護者が運動が得意か得意ではないかの比較では、運動が得意ではない保護者の子どもの方が800歩弱、実践中の平均歩数が多くなっており、統計的に有意な差が確認された。

低学年児童においては、同様の運動環境下においては、保護者の運動嗜好が高いことが身体活動を増加させる要因にはならないことが確認された。本研究の結果では、むしろ保護者の運動嗜好が低いケースにおいて身体活動が多くなっていった。

#### IV. 考察

##### 4.1 保護者の運動嗜好性と子どもの体力・運動能力テストとの関係

本研究の結果では、保護者が運動を好きであるか、得意であるかといった嗜好性によって、子ども達の体力・運動能力に有意な違いは確認されなかった。また、運動実践を通した体力テスト結果の改善状況においても有意な違いは確認されなかった。

保護者の運動嗜好性や体力は子どもの体力にも影響することを示す研究も見られる [10, 17] が、本研究では、逆の結果が得られた。これは、体格の差や運動に対する優劣の判断、評価の機会がまだ多くない低学年児童においては、保護者の運動嗜好性の影響が表出していないと推察される。一方で、保護者の運動嗜好性を背景とした子ども達の運動環境の違いが、学年があがるにつれて体力・運動能力の差を顕在化させることの懸念もある。表1や表2にあるように、保護者が運動好きや得意でなくても種目によっては、測定結果が良好なケースが見られ、少なくとも、統計的に有意に劣るというこ

とはなかった。また、運動教室という均一な運動環境下での実践後の記録に関しても、表3、表4が示すように、運動が好きでなかったり、得意でなかったりする保護者の子どもの方が改善量の多い種目が見られる。初期値にも有意な差が無いことを考えれば、同程度かそれ以上の改善が期待できることを示していると言える。

近年では、幼少期から運動好きの心を育む取組の重要性が示されているように [4, 11]、保護者が自分自身の運動嗜好性に捉われず、子どもに少しでも良い運動環境を提供できれば、体力・運動能力の改善を期待できることが示唆された。その成果は、将来の運動への距離を縮めることにつながると考えられ、ひいては運動好きを多く育むことにつながるものとする。本論文の序文でも示したように、保護者自身の運動嗜好性とは別に、子どもに運動機会を多く提供することを考えてもらうことの大切さを強調する結果であった。

##### 4.2 保護者の運動嗜好性と子どもの実践中の平均歩数との関係

本研究の結果では、運動嗜好性の高い保護者の子どもの方が、運動実践中における平均歩数が有意に少なかった。各回における実践中の平均歩数に僅かながらの違いは見られたが、どちらかの群に偏って欠席者が多かった回は無く、欠席日による影響は無視できる水準であった。また、実践中の運動メニューは、優劣を求めるといった内容ではなく、より多くの活動量を獲得できるように構成されたものであり、運動経験の差による活動量への影響は少なかったものと思われる。そもそも、前節で示したように、体力・運動能力に明確な差が見られていないため、上記のような影響は少なかったと考えられる。

これらのことを考え合わせると、本研究の結

果は、保護者の運動嗜好性と子どもの活動意欲には関係がないことを示していると言える。むしろ、保護者の運動嗜好性が低い子どもの方が意欲的に活動していたことから、本質的に子どもが有する身体活動への欲求は共通に高いと考えられ、同一の運動環境下においては、保護者の運動嗜好性によって子ども達の活動量が大きく変わるとは考えづらい。今回、運動嗜好性の低い保護者の子どもの方が意欲的に活動していたのは、普段の活動不足が背景にあると推察することもできる。つまり、日常的に身体活動が不足している子どもにおいては、今回のような実践機会に思い切り身体活動欲求を満たしているのかもしれない。逆に十分な身体活動の機会を日常的に有している児童においては、特別に多くの身体活動を示さなかったのかもしれない。いずれにしても、保護者の運動嗜好性が低くても、子ども達は十分に身体活動欲求を有していることを示唆する結果であったと考えられる。幼少期における身体活動欲求を正しく理解し、広く運動に親しませる機会を提供することで、将来における運動実施率を高められることが期待される。

## V. まとめ

本研究は、同一の運動環境下において、保護者の運動嗜好性の違いが子ども達の体力・運動能力および身体活動にどのように影響しているかを検討することを目的とした。対象は運動教室に参加した45名の低学年児童であった。保護者の運動嗜好性によって体力・運動能力に有意な違いは確認されなかった。また、運動教室を通じた体力・運動能力の改善量にも有意な違いは確認されなかった。運動実践中の身体活動に関しては、運動嗜好性の高い保護者の子ども

の方が平均歩数が有意に少なかった。低学年児童では保護者の運動嗜好性が同一運動環境下における身体活動の規定要因にはならないことが示唆された。保護者の運動嗜好性によらず均一な運動環境を提供することで、より多くの子ども達が身体活動欲求を充足させられる可能性が示された。

## 謝辞

本研究は2017～2019年度にかけて名古屋学院大学総合研究所において研究活動の補助(名古屋学院大学研究助成)を受けて実施した。また、本研究を実施するにあたり、実践活動およびデータ分析に協力していただいた2018年度卒業生の赤池穂奈美さんと山田妃南乃さん、そして、実践の共催にご協力いただいた瀬戸市教育委員会様に深く感謝致します。

## 文献

- [1] 馬場宏輝, 石山信男 (2008) 保護者の運動・スポーツ実践と意識が子どもの体力向上に与える影響に関する研究: 宮城県T小学校体力検定結果を踏まえて. 仙台大学紀要, 40(1): 97-110
- [2] 雪吹誠, 枝元香菜子 (2018) 初等体育科指導法の理解度と運動・スポーツの得意不得意及び好き嫌いとの関係. 目白大学高等教育研究, 24: 101-109
- [3] 春日晃章 (2018) 体力・運動能力の二極化傾向の出現とその後の影響. 子どもと発育発達, 16(1): 11-16
- [4] 小林寛道, 池田裕恵, 野井真吾, 鳥居俊, 内田匡輔, 佐々木玲子, 中野貴博, 春日晃章, 小澤治夫 (2018) 幼少年期の子どもの運動遊び・体育指導. 幼少年体育指導士会編, 杏林書院, 東京, pp1-10



保護者の運動嗜好性は子ども達の活動意欲や体力に影響をおよぼすのか

- [5] 北村裕美 (2018) 幼児期の子どもとその保護者の運動と食習慣. 体力科学. 67(1) : 63
- [6] 小林寛道, 國土将平, 吉田伊津美, 田中茂穂, 春日晃章, 佐竹隆, 池田裕恵, 鳥居俊, 征矢英昭, 諏訪部和也, 大澤清二, 中野貴博, 佐々木玲子, 中村和彦, 小林正子 (2014) 幼児運動指針実践ガイド. 日本発育発達学会編. 杏林書院, 東京, pp69-104
- [7] 厚生労働省政策統括官 (2018) 平成30年我が国の人口動態. 厚生労働省政策統括官, 東京, pp9-14
- [8] 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針ガイドブック. 文部科学省, 東京, pp12-46
- [9] 文部科学省 (2000) 新体力テスト 有意義な活用のために. 文部科学省, 東京, pp57-75
- [10] 長野真弓, 足立稔 (2018) 親の運動嗜好と子どもの体力との関連性の検討. 発育発達研究. 78 : 24-34
- [11] 中川昌幸 (2018) 幼児期における運動遊びの重要性とその支援に関する一考察. 保育研究. 48 : 12-19
- [12] 中野貴博 (2018) 運動の得意苦手, 好き嫌いによる楽しさを感じる瞬間の違い～運動があまり得意でない児童の心理特性～. 子どもと発育発達. 16(1) : 49-53
- [13] 中野貴博 (2016) 今の子どもたちの発育発達を考慮した運動指導の在り方. コーチングクリニック. 30(12) : 64-67
- [14] 小栗和雄, 山田悟史, 山本新吾郎 (2014) 運動が体と心の働きを高める スポーツ保育ガイドブック. 小林寛道 監修. 静岡新聞社, 静岡, pp21-59
- [15] 笹川スポーツ財団 (2015) 子どものスポーツライフデータ 4～9歳のスポーツライフに関する調査報告書. 笹川スポーツ財団, 東京, pp71-73
- [16] スポーツ庁 (2019) 平成30年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査報告書. スポーツ庁, 東京, pp10-17
- [17] 上地広昭, 中村菜々子, 竹中晃二, 鈴木英樹 (2002) 子どもにおける身体活動の決定要因に関する研究. 健康心理学研究. 15(2) : 29-38

[Original Article]

## Does guardian preference of physical activity affect children's physical activity and physical fitness?

—An examination based on changes in children's physical fitness and physical activity during a physical activity program—

Takahiro NAKANO<sup>1</sup>, Kenji YOMODA<sup>1</sup>  
Tomoaki SAKAI<sup>1</sup>, Takanori OKIMURA<sup>1</sup>

### Abstract

The purpose of this study was to examine the influence of guardian preference of physical activity on children's physical fitness and physical activity under the same environment of physical activity. The participants were 45 lower elementary school children who participated in physical activity classes hosted by Nagoya Gakuin University and the Seto City Board of Education. Physical fitness tests were administered at the first and last classes. The number of steps during practice was measured as an index of physical activity. In addition, we administered a questionnaire related to guardian preference of physical activity to the children's guardians. Differences in the children's physical fitness and physical activity during physical activity classes by guardian preference of physical activity were examined using independent t-test. There was no significant difference in improvement of physical fitness due to guardian preference of physical activity. Physical activity during the physical activity classes was significantly higher in the low preference group compared with the high preference group. Results suggested that guardian preference of physical activity was not an important factor of children's physical activity in lower elementary school children. Children may be able to familiarize themselves with a form of physical activity if they are provided with a uniform physical activity environment regardless of guardian preference of physical activity.

**Keywords:** preference of physical activity, environment of physical activity, lower elementary school children

---

1 Faculty of Health and Sports, Nagoya Gakuin University